

志賀公園遺跡と西志賀遺跡、調査の軌跡と再評価

—金城文化財保護委員会所蔵資料を中心に—

北村和宏・西原正佳・永井宏幸

1. はじめに

昭和5年、志賀公園内にある池の造成工事に伴う調査が行われてから、実に70年近い歳月が経つ。金城文化財保護委員会が所蔵する当時の出土資料は、名古屋市立金城小学校に、半世紀以上にわたって展示保管されている(写真2)。本稿は、これら金城文化財保護委員会所蔵資料を中心に、資料紹介することが第一目的となる。また、これらの資料に関連し、過去の調査事例を参考に、現在調査中の地区との比較検討を試みたい。さらに平成9年度の調査で弥生時代中期の遺構群を確認したことから、隣接する西志賀遺跡との比較検討も必要となった。そこで、西志賀遺跡も含めて調査の軌跡と再評価を第二の目的とする。以下、過去の調査事例を振り返り、次に金城文化財保護委員会所蔵資料の紹介、最後に志賀公園遺跡と西志賀遺跡の接点を検討してみたい。(永井)

2. 調査の軌跡

西志賀遺跡の貝層の存在は、『尾張名所図会』『尾張志』等によって早くから知られていた(第1表)。昭和5年夏、志賀公園遺跡が発見されたのを契機に、吉田富夫は、西志賀土地区画整理組合組合長近藤孝次郎の示唆を得て、西区貝田町を現地踏査。西志賀遺跡の貝層の存在を改めて確認した。その直後に行われた、小栗鐵次郎ら愛知県史蹟名勝天然記念物調査会の調査を皮切りに、戦前から戦中にかけて、吉田富夫、島田貞彦・三森定男(京都大)、藤沢一夫、杉原荘介(明治大)らが相次いで調査に入る。学術調査とは異なるが、樋口敬治の地道な活動も戦前のことである。戦後になって、山内清男(東京大)、澄田正一(名古屋大)、杉原荘介(明治大)などの調査が行われる。紅村弘も戦後、本格的に調査に乗り出した。ただいずれの調査も東西約32m・南北約23

寛政4(1792)	『尾張名所図会』後編巻3綿神社の項に、三郷悪水路の開削時に、「蛤の殻の多く出し所ありて今もそこを貝塚とよべり」とある。
天保14(1843)	『尾張志』(下)春日井郡綿神社の項に、「尾張名所図会」と同様の記述。
昭和5(1930)	6月8日(～12月25日)志賀公園の造成時に池を掘削したところ行基焼碗・皿が多数出土[志賀公園遺跡](愛A地点)。 17日吉田富夫は志賀公園遺跡の西方に「貝塚」の地名があることを聞き、土器・石器を採集[西志賀貝塚]。 6月18日愛知県史蹟名勝天然記念物調査会が、西志賀貝塚を表面採集。20日同調査会が発掘調査(愛B地点)。 12月12日吉田富夫、京都大学の島田貞彦・三森定男を招き、西志賀貝塚を視察。小規模な発掘調査を実施(吉A地点)。 14日吉田富夫・三森定男が西志賀貝塚発掘調査(吉B地点)。
昭和6(1931)	10月～翌年7月西志賀貝塚の遺跡範囲内を流れる三郷悪水路の暗渠化工事が行われ、樋口敬治らが多数の遺物を採集(樋A地点)。
昭和7(1932)	3月4・5日吉田富夫、藤沢一夫の協力を得て西志賀貝塚発掘調査(吉C地点)。
昭和8(1933)	12月12日樋口敬治、西志賀貝塚にて人骨検出(樋B地点)。13日中谷内務部長・小栗鐵次郎ら、これを調査・採集。銅族及び前期弥生土器伴出。
昭和16(1941)	貝田町1丁目より50m程南で防空壕を掘った際、伸展葬の人骨と若干の土器・石鏃・紡錘車など出土。
昭和18(1943)	9月7日～11日明治大学の杉原荘介、西志賀貝塚を第1次調査(明A・F地点)。
昭和22(1947)	8月東京大学人類学教室山内清男・渡辺直経・田辺義一ら、西志賀貝塚を調査(東地点)。
昭和23(1948)	名古屋大学の澄田正一助教授、西志賀貝塚を発掘調査(名地点)。11月2日～7日明治大学杉原荘介、西志賀貝塚を第2次調査(明B・C・D・E地点)。紅村弘、同年より昭和25年までに数次にわたって、西志賀貝塚を発掘調査(組A・B地点)。
昭和28(1953)	7月11日～8月4日日本考古学協会が貝塚の北側を全掘(日地点)。
昭和51(1976)	名古屋市教育委員会、志賀公園東南隅を立会調査。
平成5(1993)	名古屋市教育委員会、志賀公園内金城コミュニティーセンター地点を調査(市A地点)。
平成6(1994)	名古屋市教育委員会、志賀公園内池の浄化施設地点を調査(市B地点)。
平成7(1995)	名古屋市教育委員会、西区貝田町市営住宅建築地点を調査(市C地点)。
平成8(1996)	愛知県埋蔵文化財センター、志賀公園北の神戸製鋼所跡地の調査を開始。

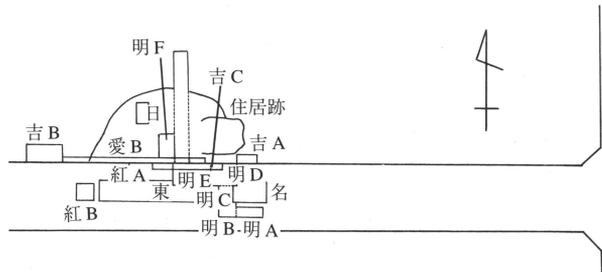
第1表 調査の軌跡

mの範囲内で行われており（第2図参照）、貝層だけを狙った調査であったことが、市街化の進んだ今日となつては惜しまれる。

昭和初期に始まるこれら一連の調査・分析（文献一覧参照）は、名古屋市北部沖積地の遺跡をクローズアップし、弥生時代前期の土器の型式学的・層位学的研究を大いに推進したものとして高く評価できよう。しかし、今日でこそ弥生前期の土器編年の指標として著名な西志賀遺跡だが、実はごく狭い範囲の貝層しか発掘調査されていないという事実を忘れるべきではない。今後生じるであろう資料・情報を蓄積・収集し、西志賀遺跡の全体像を明らかにし、志賀公園遺跡をはじめとする周辺の遺跡との関連を解き明かすという大きな課題が、未解決のまま残されている。（西原）



写真1 西志賀遺跡の調査（S.5.6.20頃）



第2図 西志賀遺跡貝塚地区拡大図
（明治大資料を改変 1：1000）



第1図 調査地点位置図（1：5000）

3. 金城文化財保存委員会所蔵資料の実測調査

3.1. 資料の概要

金城文化財保護委員会所蔵資料は安達厚三、伊藤貞樹によって一部の資料が紹介されているものの、そのほとんどが未公表資料（文献38・60）。さて、今回掲載した資料は、実測可能な134点、その他の破片資料を含めると約140点近くある。そのほとんどが昭和5年調査時の資料で、若干西志賀遺跡の資料も含まれていた。志賀公園遺跡資料のなかには「掘出票」のラベルが貼布されている（写真3）。その総数は24点（第3表）あり、記載内容の「字番」から出土地点を復元すると、ほぼ現在の池に含まれる（第3図）。したがって、「掘出票」貼付のない資料もおそらく池の造成工事に伴う調査時の資料と判断できる。以下、概ね時代の古い資料から3項目に分けて紹介する。

（永井）



写真2 名古屋市立金城小学校の展示



写真3 掘出票表記の一例



第3図 字番表記資料の出土地点（明治17年地籍図をもとに作成 1：2500）

3.2. 弥生時代から古墳時代の遺物

(第4～6図)

以下、弥生～古墳時代の時期はⅠ～Ⅵ期、廻間式、松河戸式、宇田式に区分して示した。弥生時代の時期区分は、概ねⅠ期は前期、Ⅱ～Ⅳ期は中期、ⅤからⅥ期は後期とした。弥生Ⅴ～Ⅵ期は廻間式と重なる部分もある。

1～9は遺物に「西志賀貝塚」と朱色で注記された資料(第4図)。

1～3は遠賀川系土器の甕形土器で弥生時代Ⅰ期の資料。いずれも口縁端部に刻み目を入れる。2・3は4～5条の沈線紋を施す。2は土器内面に出土地点の様子を図示している珍しい資料(写真28)。4は弥生時代Ⅲ期の条痕紋系土器。調整具の原体は二枚貝。5は弥生時代Ⅳ期の台付甕。6～9は弥生時代Ⅴ期の資料。6は器台。7は高

杯の口縁部。波状紋を施す。8・9は壺の口縁部。いずれも口縁内面に櫛状工具による羽状紋と口縁端部に多条沈線紋を施す。また、9は口縁内面の波状紋下に扇状紋を施す。

10～52は志賀公園遺跡の弥生～古墳時代の資料(第4～6図)。

10は弥生時代Ⅴ期の台付甕の脚部。11・12は弥生時代Ⅴ期の高杯の脚部。13～15は壺。13は内彎口頸壺で廻間Ⅱ式か。14は外面全面にタテ方向のミガキを施す。底部付近に1ヶ所焼成後の穿孔がある。弥生時代Ⅴ期か。15は有段口縁壺で体部上半はタテ方向、下半はヨコ方向のミガキを施す。松河戸Ⅱ式。

16～27は壺(第5図)。

16は名古屋市博物館の受託資料。パレス壺で、口縁外面に赤彩をし、3本1単位の棒状浮紋を3ヶ所に配する。頸部直下に1条の突帯、その下



写真4



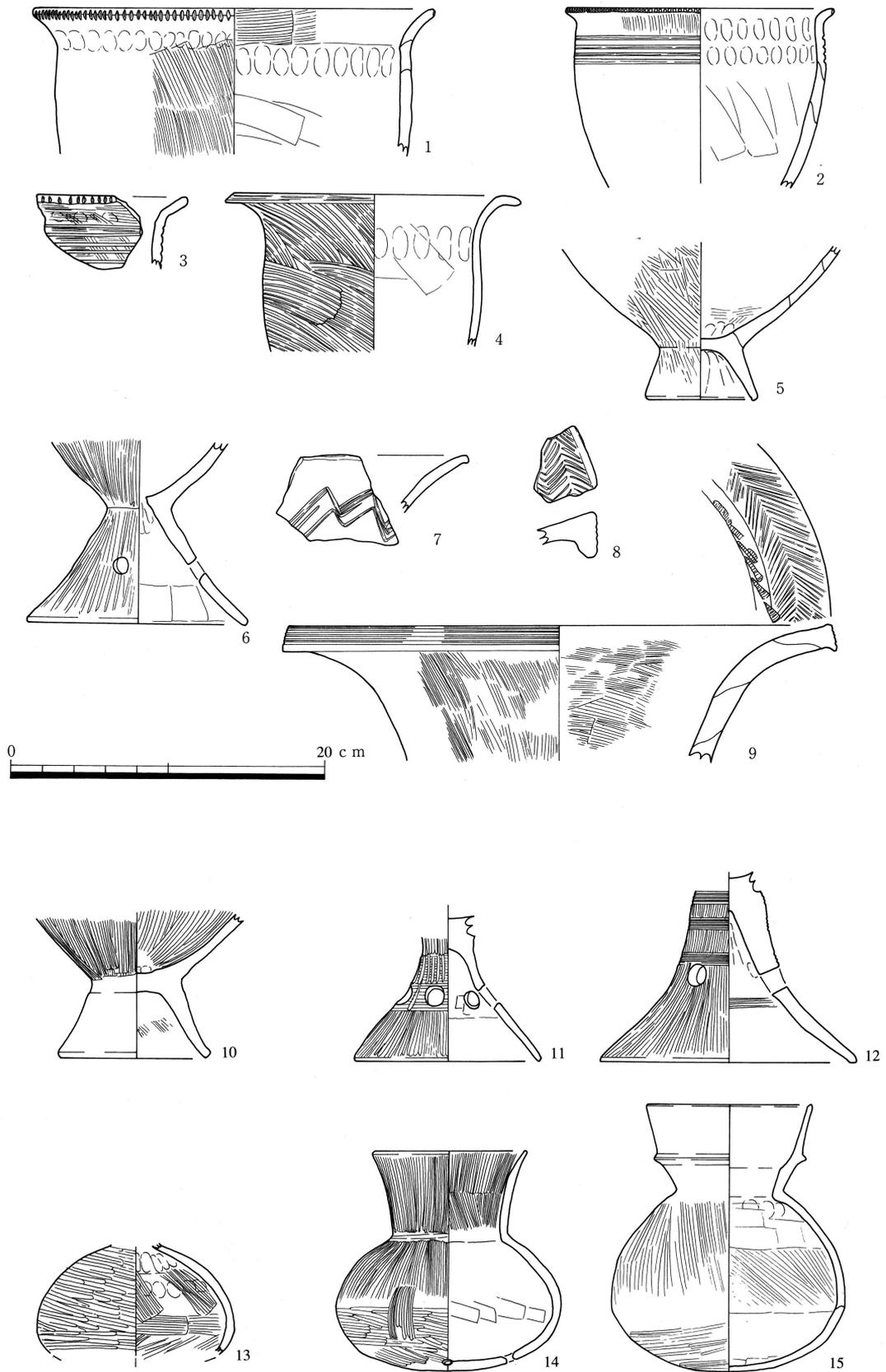
写真5



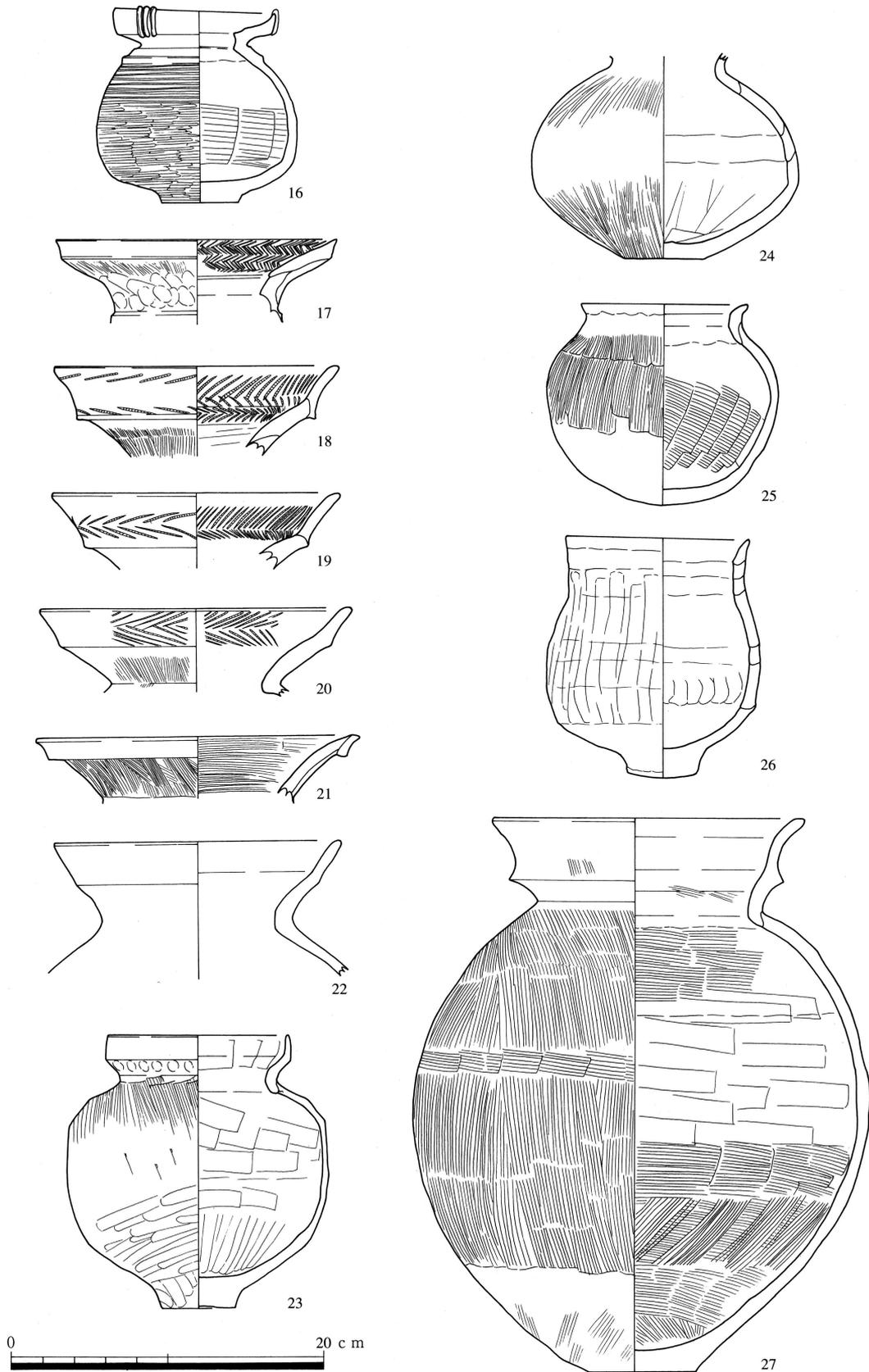
写真6



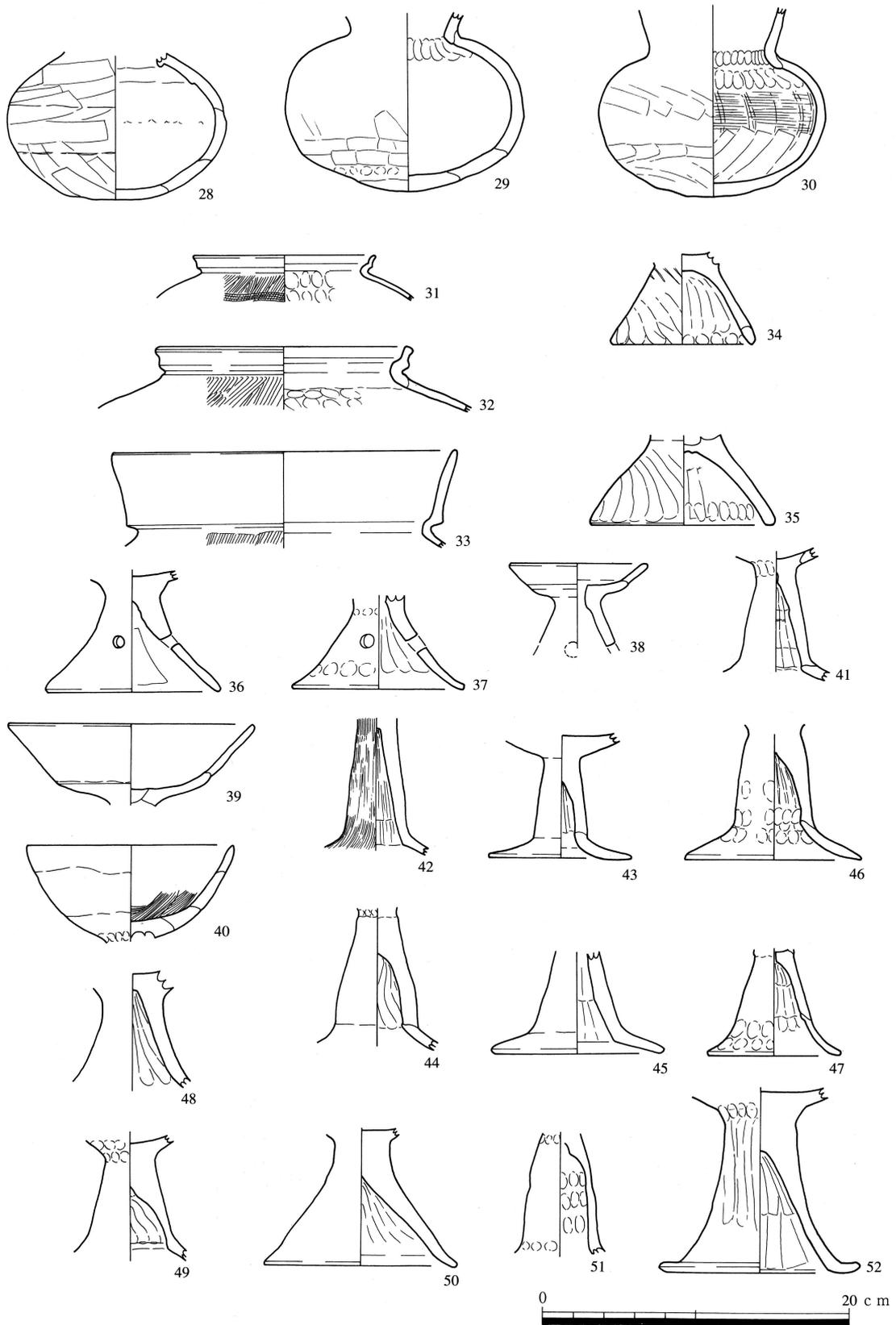
写真7



第4図 金城文化財保護委員会所蔵資料実測図① (1:4)



第5図 金城文化財保護委員会所蔵資料実測図② (1:4)



第6図 金城文化財保護委員会所蔵資料実測図③ (1:4)

に多条沈線を施す。多条沈線より底部にかけてヨコ方向のミガキ、赤彩を施す。廻間Ⅰ式。17はパレス壺、廻間Ⅱ～Ⅲ式。18～20は柳ヶ坪型壺。口縁部内外面に羽状紋を施す。松河戸Ⅰ式。21は広口壺、22は有段口縁壺で、いずれも松河戸Ⅰ式か。24はタテ方向のミガキが僅かに確認できる。口縁部がやや外反する直口壺。23・25・26はいずれも調整段階を省略した松河戸式の壺。27は大型の有段口縁壺。16同様に名古屋市博物館の受託資料、現在常設展示されている。松河戸Ⅱ式。

28～52は壺・甕・高杯（第6図）。

28～30は壺の体部。いずれも口縁がやや外反する直口壺。松河戸式。31～33はS字状口縁台付甕（S字甕）の口縁部。31はC類、32はD類、33は山陰系口縁のS字甕。34・35はいずれも宇田型甕の脚部か。36・37はおそらく有段高杯の脚部、大きく緩やかな外反脚で透孔を伴う。松河戸Ⅰ式か。38は小型器台、廻間Ⅲ式か。39～52は松河戸式の高杯。39は有段高杯の杯部で松河戸Ⅰ式。40は椀型の杯部で松河戸式に後続する宇田式か。41～52はいずれも有段高杯の脚部。41～45は松河戸Ⅰ式。46～52は松河戸Ⅱ式。 (永井)



写真8

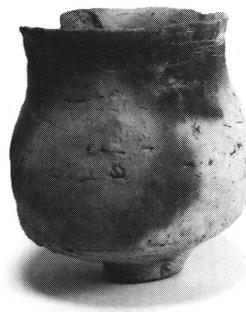


写真9



写真10



写真11

3.3. 古墳時代～古代の遺物（第7・8図）

須恵器・灰釉陶器の時期は概ね窯式編年に依った。

53・54は松河戸Ⅱ式の高杯。55は尾張型埴輪。円筒埴輪は55以外に1976年に立会調査が行われた地点の出土資料や、現在調査中の地点（96A・97E）からも出土しており、5～6世紀代の古墳の存在が指摘できる。56は名古屋市博物館受託資料。当地域の最古段階の須恵器として注目されている羽釜形の杯。体部に2回転させながら不揃いな波状紋を施す。その下半は弱い回転ケズリ、底部付近は不定方向のケズリを行う。57～61は城山2号から東山11号窯式に相当する須恵器。57・58は杯身。59・61は高杯の杯部、60は杯蓋。62は脚部に円形の透孔を3ヶ所もつ高杯。東山11号窯式に相当。63は器台の脚部。東山11号窯式か。以上、古墳時代後期の資料。

64・65は提瓶。両者ともに口縁部を欠くが、東

山50～岩崎17号窯式に相当する。なお、65は「昭和8年7月6日公園内池再窟際地中カラ発見ス」と札の貼付がある。66は大型甕の口縁部。2～3条の沈線に区画された波状紋が2段施す。東山50号窯式か。

67～87（第8図）は83・84の灰釉陶器を除いてすべて須恵器。

67は口縁部を欠くが、広口甕。体部上位に1条の沈線を施す点から6世紀以前の資料。68～71は杯。68は杯蓋で東山50号窯式、69は杯身で東山44号窯式、70は杯身で東山50号窯式、71はつまみと内面に口縁部より突出するかえりをもつ杯蓋で東山50～岩崎17号窯式。72は注口部がやや突出し、体部中位に刺突紋を施す甕、東山50号窯式。73～75はいずれも口頸部のない平瓶。73は過去に復元されているため器形が不明確となるがおそらく東山50号窯式前後が想定できる。74は体部の張りが上位にあり、東山50号窯式。なお、65と同様に



写真12



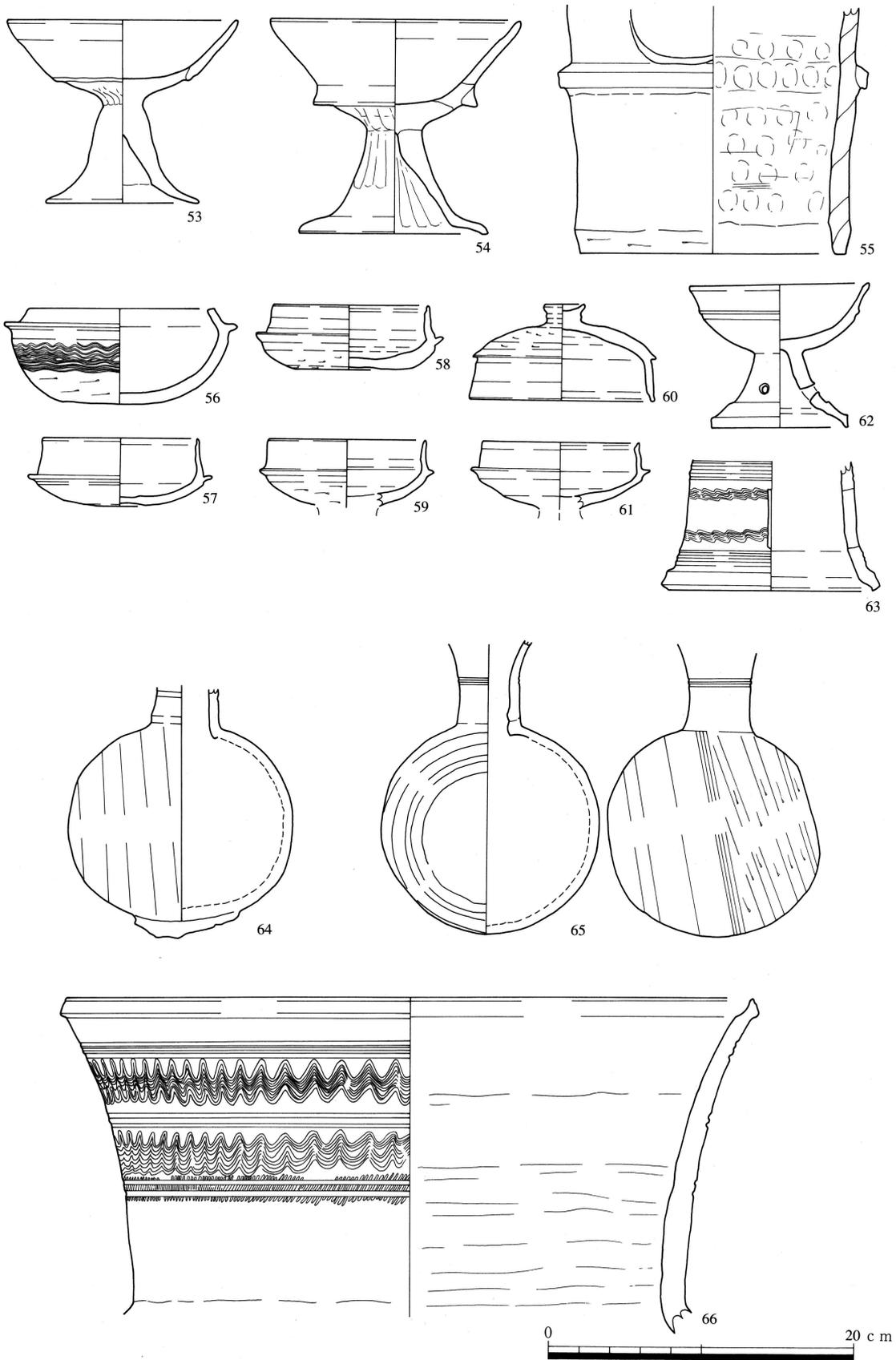
写真13



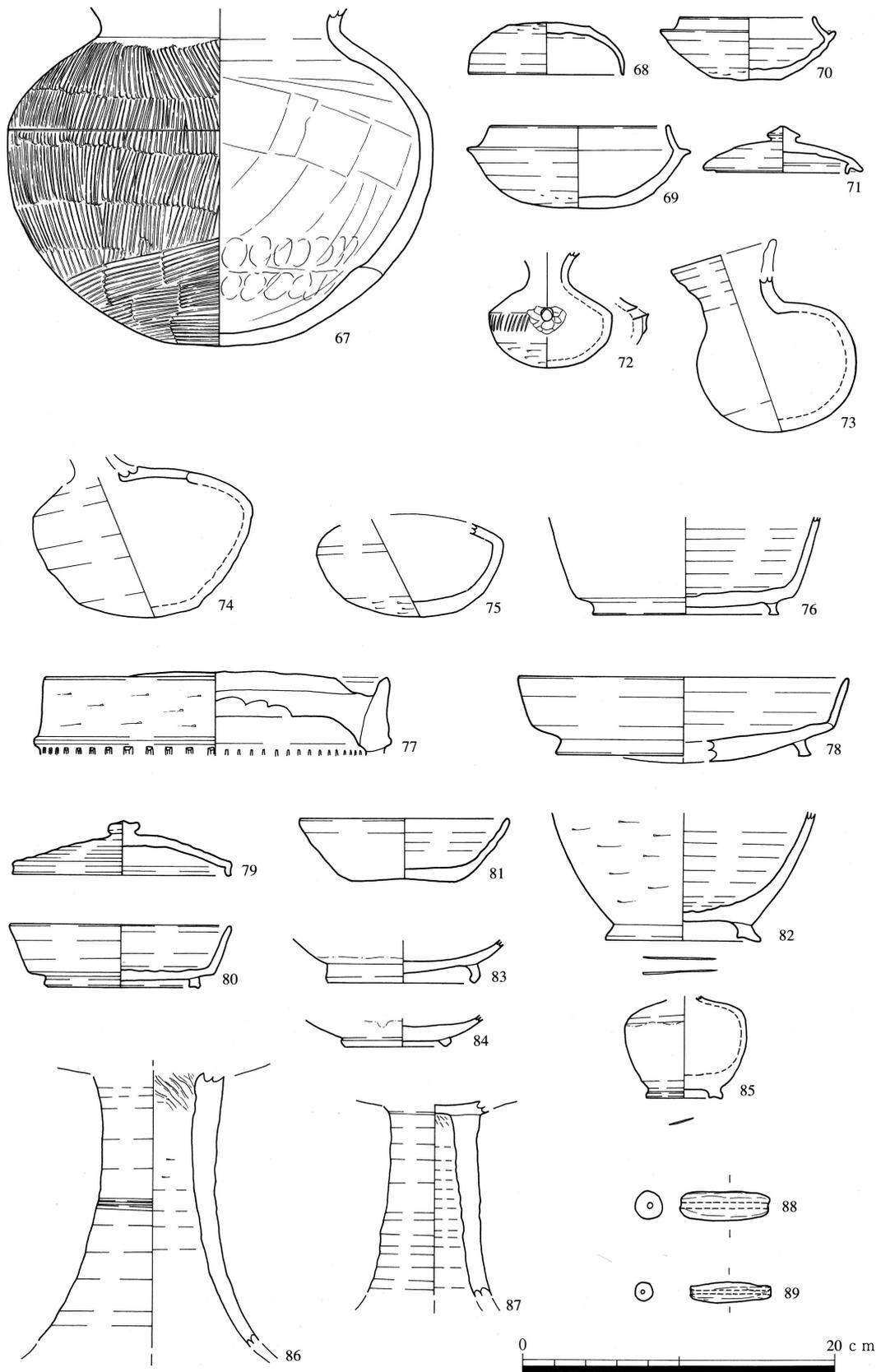
写真14



写真15



第7図 金城文化財保護委員会所蔵資料実測図④ (1:4)



第8図 金城文化財保護委員会所蔵資料実測図⑤ (1:4)

「昭和8年7月6日公園内池中再窟ノ際発見 解人吉村」と札の貼付がある。75はやや扁平な体部となり、高蔵寺2号窯式。76は箱形で杯部の深い有台杯、岩崎25～折戸10号窯式。77は脚部が故意に打ち欠いたかのように割れ目が揃う円面硯、硯部は使用痕が見られない、高蔵寺2号窯式。78は大型で杯部の浅い有台杯、底部が若干高台部分より下がる、岩崎25号窯式か。79は扁平な擬宝珠形をつまみをもち、口縁端部を下方へ屈曲させる杯蓋、折戸10～井ヶ谷78号窯式。80は箱形の有台

杯、折戸10号窯式か。81は底部に回転糸切り痕が残る椀、折戸10号窯式。82は長頸瓶の底部で、折戸10号窯式か。83は椀の底部、底部内面に灰釉のハケ塗り痕が見られる、三日月高台となる黒笹90号窯式。84は椀の底部、高台部分がかかり磨耗している、折戸53号窯式か。85はミニチュアの瓶、黒笹90号窯式か。86・87は高盤の脚部で、折戸10～井ヶ谷78号窯式か。

88・89は古代の土錘で、2点とも刺網の漁網錘と考えられる。
(永井)



写真16



写真17



写真18

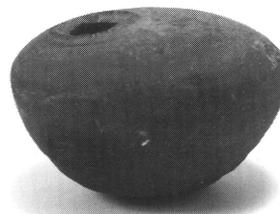


写真19



写真20

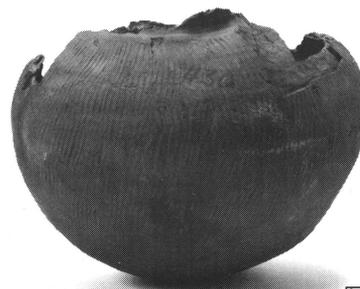


写真21

3.4. 中世以降の遺物

実測し得た遺物は、総計で45点ある。中世末・近世初の大窯期の匣鉢1点が認められるほかは、いずれも中世土器・陶器である。中世陶器には、いわゆる山茶碗・皿・鉢類、古瀬戸、渥美窯産の壺・甕類、その他がある。中世土器は皿がある。量的に多いのが山茶碗・皿類で、各14点ある。以下、遺物の概要について記す。

山茶碗・皿・鉢類 (90~120)

山茶碗は、南部系山茶碗90~100が多く、第5型式から第9型式のものが認められるが、量的には第6・7型式のものが多く、第7・8型式のものは瀬戸窯産のもので、第5・6型式のものは中世猿投窯産と推定される。北部系山茶碗は3点101~103がみられ、いずれも第V期のものでは

る。小皿は、南部系のもの104~115・117が殆どである。第6~9型式のものが多く、量的には第7ないし8型式のものが多く、北部系は1点116で、第V期のものである。鉢類は、3点118~120がある。118・119は、ともにほぼ完形の片口鉢で、南部系山茶碗の第5型式に併行する型式のものである。118は中世猿投窯産で、119は常滑窯産と考えられるものである。120は、瀬戸窯産の鉢の底部片で第9型式に併行するものである。なお山茶碗および小皿に融着したものが92・117と各1点見られることは、消費地遺跡出土という点で注目される。

古瀬戸 (124~130)

古瀬戸 (中世瀬戸窯産の施釉陶器) には、灰釉四耳壺124~126、灰釉小壺127、仏供129、鉄釉合子128、緑釉皿130の各種がある。

年代	北部系			南部系			古瀬戸		渥美窯	時期を限定し得ないもの
	山茶碗	小皿	編年	編年	山茶碗	小皿	鉢	編年		
1200				第3型式					121 122 123	132 133 134
				第4型式						
			第I期	第5型式	90		118 119	前I期		
			第II期							
			第III期	第6型式	91 92 93	104 105 106 107		前II期	127	
1300			第IV期	第7型式	94 95 96 97 98 99	108 112 109 113		前III期	125 126	
	101 102 103	116	第V期	第8型式	100	110 114 111 117		前IV期		129
								中I期	124	
								中II期		
			第VI期	第9型式		115	120	中III期		
								中IV期		
	1400			第VII期	第10型式				後I期	
			第VIII期					後II期		
			第IX期	(第11型式)				後III期	130 128	
			第X期					後IV期		
1500							(大窯期)	131		

*編年観は下記の文献に基づく。
 藤澤良祐 「付論1 瀬戸地方の北部系山茶碗窯」『尾呂』瀬戸市教委1990
 中野晴久 「[2] 常滑・渥美」中世陶磁器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社1995

第2表 中世以降の遺物編年対比表

灰釉四耳壺の124は中Ⅰ期で、125は前Ⅲ期、126は前ⅢないしⅣ期のものである。後二者は、釉が発色不良で白濁している。125の底部には、外面からの穿孔が認められ、蔵骨器として用いられた公算が大である。なお、126にも径3ミリほどの小さな穿孔が認められる。しかしこれはあまりにも小さく整った穿孔で、内面の孔口の端部が斜めに削られているなど、採集後の穿孔の疑念をもつものであり、実測図には、敢えて図示しなかった。灰釉小壺127は、口頸部を欠く。高台および耳は貼付されていないが体部の形状から灰釉四耳壺を模したミニチュアと考えられるもので、前Ⅱ期のものでと推定される。仏供129は、脚部にして杯部が大型で、前ⅢないしⅣ期に比定される。完形品。鉄釉合子128は、後ⅡないしⅢ期のもので完形品。焼成過剰により釉はぜをおこしている。口縁端部に灰釉が施された縁釉皿130は、完形で後Ⅲ期に比定される。

渥美窯産の壺・甕類 (121~123)

胎土・形状から渥美窯産としたが、中世猿投窯の鳴海地区で、近年、122と類似した甕が焼成されていたことが知られ、産地同定については、今後なお検討を要す。121は広口壺、122は、大形甕で、ともに口縁上端部に1条の沈線状の凹みが認められる。123は、甕類の胴部片で、押印文が施されている。121・122は12世紀代に、123も同様の年代に位置付けられよう。

その他 (134)

134は、その形態は須恵器ないし灰釉陶器の長頸瓶に類似するが、製作手法は粘土紐の積み上げを行っておりこの点で中世的である。この遺物については今後の検討に期したい。

大窯期の匣鉢 (131)

大窯期(16世紀?)のものと思われる。底部と体部の境に穿孔がある。匣鉢は、本来、窯道具であり、何故、窯業地からかなり離れた消費地で出土したのか、判然としない。

土師皿 (132・133)

中世土器の皿(土師皿)は2点あり、完形品。ともに口縁部をヨコナデ調整し、内面をコテを用いて整形しているのに対して、体部外面は指圧による凹凸のままである。時期は特定し得ない。

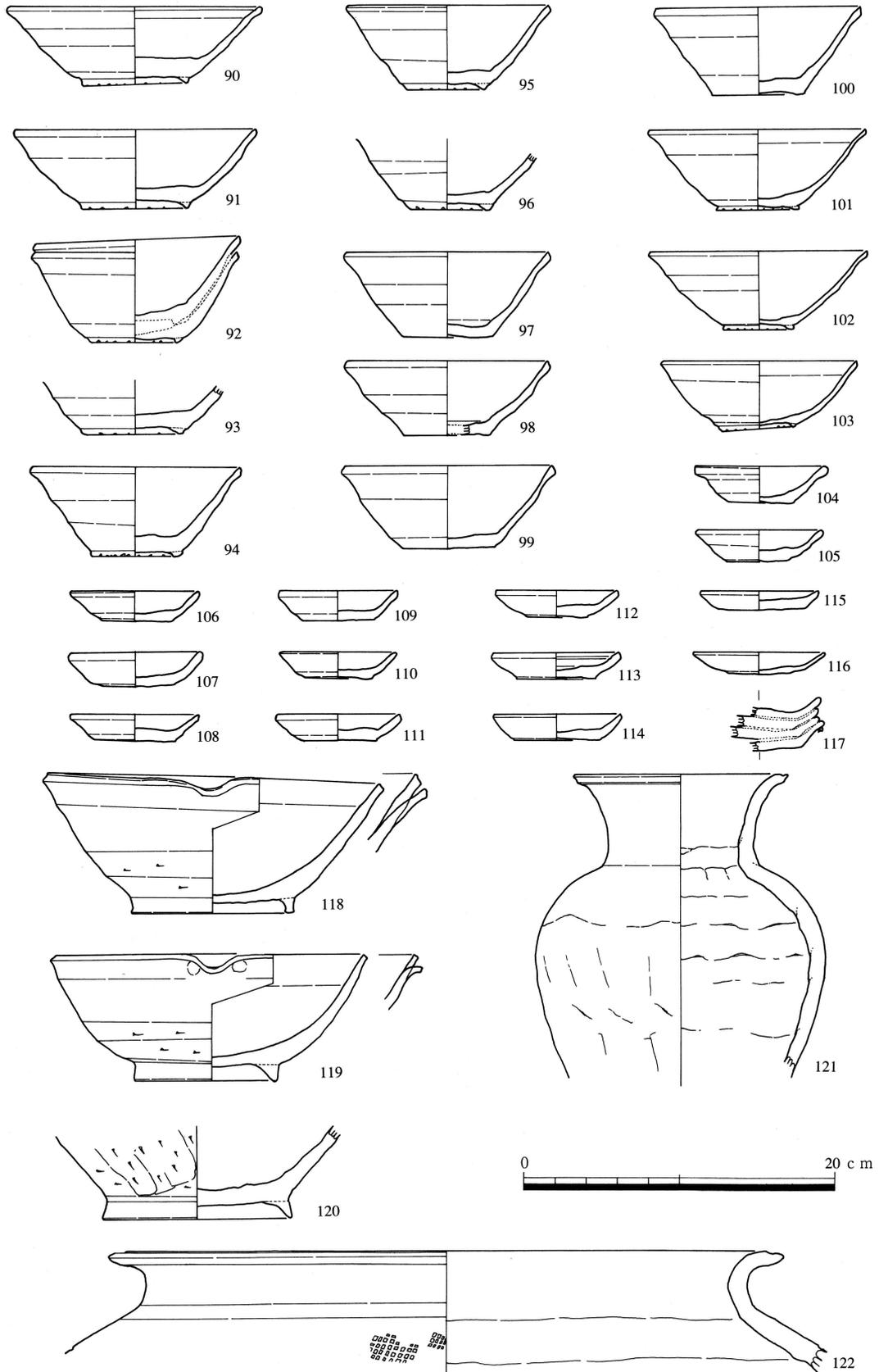
これらの遺物の個々の型式・年代の推定について整理したのが第2表である。全体的にみて中世を通じて遺物がみられるものの、13世紀~14世紀前葉に集中し、14世紀中葉以降は僅少となる傾向が看取される。遺物の性格として、古瀬戸の灰釉小壺・鉄釉合子・仏供・縁釉皿、山茶碗・皿・片口鉢類、土師皿などに完形品ないし略完形品が多くみられること、また穿孔された四耳壺の存在など、蔵骨器およびその関連遺物がみられる。こうしたことから、遺物が採集された地点に「中世墓」が含まれていたことが推定できる。(北村)



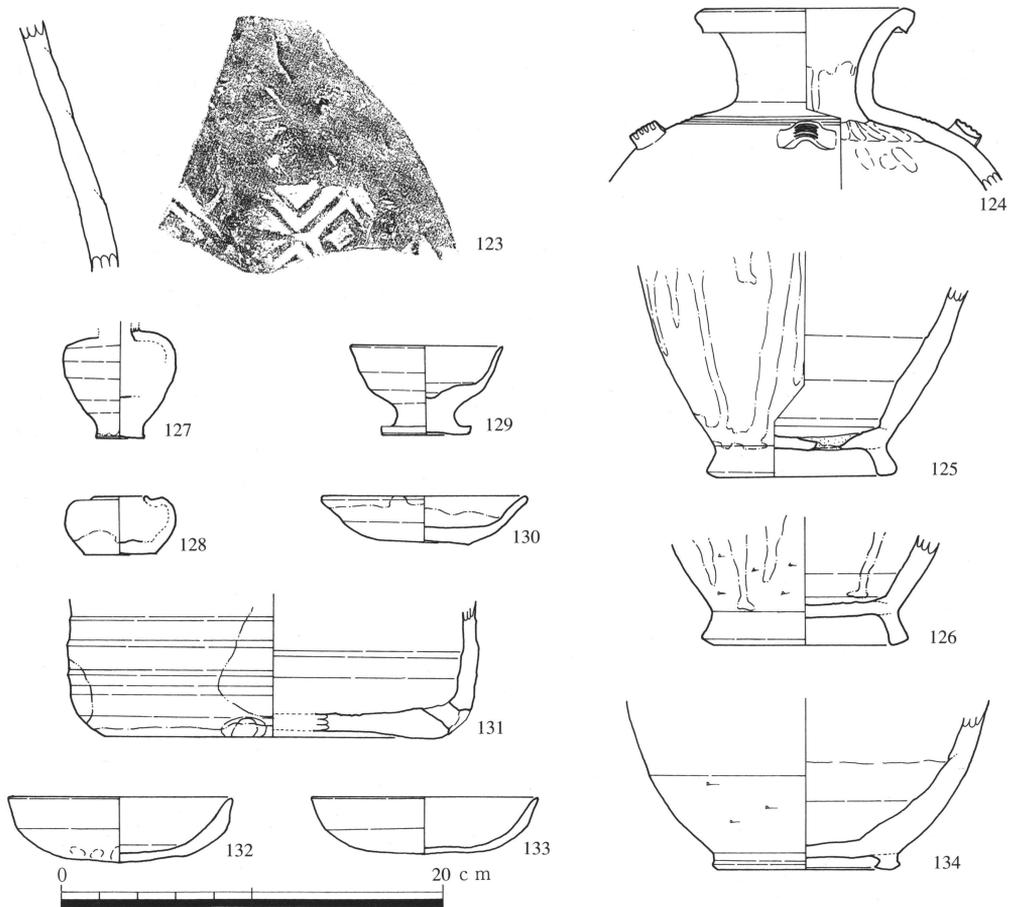
写真22



写真23



第9図 金城文化財保護委員会所蔵資料実測図⑥ (1:4)



第10図 金城文化財保護委員会所蔵資料実測図⑦ (1:4 123は1:3)



写真24



写真25



写真26



写真27

3.5. 小結

以上、金城文化財保護委員会所蔵資料の紹介をした。掘出票などの注記がある資料については、金城小学校玄関横に、それ以外の資料については小学校2階児童会室に展示・保管されている。今回の実測調査で提示しなかった資料のなかには、小型の曲物や西志賀遺跡の石器・獣骨などがある。なお、資料の一部については、名古屋市博物館への受託資料もあるが、資料のほとんどが散逸することなくまとまって保管されている。ただ、残念なことに、曲物などの木製品や五輪塔などの石塔が所在不明となったり、出土状況などの情報は70年以上の歳月によって大きな障害を受けている。

このような状況下において「掘出票」は、遺物の出土地点・出土年月日などの情報を提供してくれる。票の貼付がある資料は明治17年地籍図に「字番」毎に点を印した(第3図)。

文献37は「掘出票」とともに当時の出土状況を知る唯一の情報源。そのなかで小栗鐵次郎は出土層位・出土地点・出土資料の内容などについての確にまとめている。以下、記述内容と資料を併せて検討してみる。

(1) 出土地点について

揚戸368番地(地目塚)・同369番地(地目田)・同409番地(地目田)より遺物を発見。

*「掘出票」貼付資料には「369番地」は含まれていないが、票の番号から少なくとも450点の資料があったと考えられる。しがたって当時は369番地の資料も多数出土していたことが想定できる。また、掘出票のなかには、これら3筆以外の表記もあり、隣接した地点も含めて遺物の採集が行われたと考えられる。

(2) 出土年月日について

昭和5年6月8日から12月25日までの調査。

*「掘出票」貼付資料は6月6日～9月29日まで

確認できる。6月6日資料は票番号が「1」となっており、初回の調査分として特筆できる。

(3) 出土層位について

全体の出土層位については「地下2尺及至9尺の地層中」の記述がある。368番地の塚については、「1株の梅樹が高2、3尺、径1間にも満たぬ墳丘と云ふ程でもない土丘(鳩塚)の上に生じて居て、その4尺の地下に粘土に灰の混した厚1尺の土器包含層があり」の記述がある。また、遺物の種類別の記述は次のようにある。弥生式土器(古墳時代中期まで含む)は「6尺以上の最下層」、齊瓮(須恵器)は「地下2、3尺の下から発見」、行基焼(山茶碗など灰釉系陶器)は「存在の深度は齊瓮と略同様」、曲物(井戸)は「409番地内数箇所地下約4尺の所より発見」とある。

*1尺を約30cmに換算し現在の標高に置き換えると、旧耕作土の標高が4.7m前後(県埋文セ調査区97Eから推算)。これを当時の地表面とすると、耕作土層から約60cm下位の4m前後に古代～中世の遺物が、さらに約180～270cm下位の2～3m前後に弥生～古墳時代の遺物が出土したことになる。平成8～9年度の調査から古代～戦国までの遺構面(上面)が4.3m前後、弥生～古墳時代の遺構面(下面)が2.7m前後の数値が確認されている。この上面・下面の標高は池地点の「地下2尺及至9尺の地層中」の記述層位とほぼ一致する。なお、井戸の出土した層位は96Dで確認した井戸の基底部(曲物)の標高4～5mと一致する。

(4) 出土遺物について

出土層位で示したように「弥生式土器」「齊瓮」「行基焼」「曲物」「石塔」の5項目について記述がある。

*池地点の遺物と現在調査中の地点の遺物を比較すると、概ね遺物の様相は一致する。ただ、愛A地点で出土している遺物のなかには5～6世紀の

須恵器が確認できる。これら比較的古い古墳時代後期の須恵器については、遺構・遺物ともに我々の調査地点では確認されていない。逆に、97Eで確認した弥生時代Ⅱ期末～Ⅲ期（朝日～貝田町式）に比定できる遺物は池地点にはない。

(5) 池（愛A）地点の性格

当時の評価としては、西志賀遺跡を含めて名古屋台地の縁辺から急速に落ちた沖積地に遺跡が存在することに対して関心が高かったようだ。現在のように尾張平野低地部の調査が盛んに行われるようになるとはたして予期していたのであろうか。

さて、愛A地点の資料から次のような性格が考えられる。

まず、弥生～古墳時代については、池地点に隣接する97Eから弥生時代中期から古墳時代にかけての墓域が展開する。愛A地点まで墓域が広がるかは不明ではあるが、特に松河戸式の資料は使用痕がほとんどなく、一時的な使用で廃棄された様相がある。壺、高杯が中心となる器種構成で、甕が非常に少ない。また、これら松河戸式以前の資料ではあるが、小型器台なども確認できることから、下面では墓域が展開していた可能性がある。

5～6世紀の資料については、杯・高杯が中心となる一方、尾張型埴輪や器台など古墳に出土する資料が若干見られる。大型古墳の存在より小規模古墳群を想定しておきたい。

つぎに古代については、7世紀後半から9世紀の資料がみられる。高蔵寺2号窯式とした未使用の円面硯は一般集落から出土することが少ない。また、97Fなどで確認している7～9世紀の大溝群と庄内川、矢田川の合流地点付近という立地条件に呼応させて考えれば、物資流通の中継点としての空間を想定してはどうだろうか。

最後に、中世～戦国については、弘化3（1846）年の村絵図によると現在地藏堂となっている「揚戸」墓地のほか、隣接してもう1ヶ所墓地の表記がある。地図からは江戸時代末期まで遡る墓地であるが、出土資料からは蔵骨器・五輪塔・宝篋印塔などが含まれていることから、中世に遡る墓地が想定できる。のちに「揚戸古墓地」と呼ばれるようになった由縁は中世までは確実に遡れる。

（永井）

票番号	月日	字番	監督	図版番号
1	5.6.6	揚戸409	三谷重太郎	9-90
10?	5.6.?	揚戸367	佐野欽一	9-111
116	5.6.?	揚戸367	石田清三郎	8-80
?24	5.6.11	揚戸409	三谷重太郎	9-110
152	5.6.18	揚戸367	佐野欽一	8-79
157	5.6.18	揚戸367	佐野欽一	8-75
304	5.6.30	揚戸407	?	7-64
?	5.6.?	揚戸?	佐野欽一	10-127
335	5.7.23	揚戸409	石田清三郎	10-133
351	5.7.28	揚戸370	佐野欽一	8-71
358	5.7.29	揚戸367	三谷重太郎	10-128
370	5.8.6	揚戸368	石田清三郎	9-109
372	5.8.7	揚戸368	柴田欽太郎	5-26
?	5.8.23	揚戸368	三谷重太郎	4-11
415	5.8.25	揚戸368	三谷重太郎	6-30
420	5.8.25	揚戸368	三谷重太郎	5-21
434	5.8.29	揚戸368	三谷重太郎	6-40
438	5.8.29	揚戸368	三谷重太郎	6-52
464	5.9.2	揚戸368	佐野欽一	8-68
468	5.9.7	揚戸365	?孝次郎	8-75
469	5.9.9	揚戸365	?	8-69
479	5.9.19	揚戸367	水?孝太郎	8-70
?48	5.9.29	揚戸368	三谷重太郎	6-29
425	?	揚戸367	佐野欽一	7-56

第3表 掘出票と実測図番号対照表



写真28



写真29

4. 遺跡の再評価

4.1. 近年の調査

現在進めている（財）愛知県埋蔵文化財センターの調査以前に、名古屋市教育委員会により4ヶ所の調査が行われている（第1図）。志賀公園遺跡と西志賀遺跡の接点を考える前に、整理しておく。

名古屋市教育委員会の調査は志賀公園遺跡が3ヶ所、西志賀遺跡が1ヶ所の内訳となる。

まず、志賀公園遺跡については、1976年の志賀公園南東隅の立会調査（仮称市A地点）、1983年の金城コミュニティーセンター建設の事前調査（仮称市B地点）、1994年の池浄化施設建設の事前調査（仮称市C地点）がある。1976年の立会調査以外はいずれも概要報告が刊行されている（文献39・40）。また、1996年に刊行された名古屋市教育委員会の報告書の考察で村木誠が市A地点資料の一部を資料紹介している（文献41）。これら3ヶ所の調査成果を紹介する。

市A地点で出土した資料のうち村木が紹介した資料は廻間Ⅲ式から松戸戸Ⅰ式にかけてのもの。これらの資料のほかに弥生時代、古代から中世・戦国の遺物も多数出土している。そのなかに、尾張型埴輪が1点ある。未報告なので詳しくは正式な報告書の刊行を待たねばならないが、おそらく倒立技法を持つ大型円筒埴輪の可能性が高い。

市A地点から道路沿いに西へ約150mに市B地点がある。調査面積は約280m²。遺構は中世?の柱穴のみ。遺物は自然流路の上端から出土した弥生時代Ⅳ・Ⅴ期から6世紀代の遺物群と、その上面、柱穴を検出した面から8～16世紀の遺物が出土している。

昭和5年調査の池地点（仮称愛A地点）の東側に隣接して市C地点がある。調査面積は約100m²。遺構は溝・土坑のみ。遺物は6～8世紀の須恵器など、11～16世紀の陶磁器類が出土している。

いずれの地点においても、明確な遺構が確認されていない。したがって、遺物から探ってみると以下の3点が指摘できる。

（1）弥生時代の遺物が市A・B地点で確認できる。いずれも詳細は不明であるが居住域が展開していたとは判断しづらい。

（2）古墳時代は特に市A地点で充実している。同地点では円筒埴輪も出土しており、愛A地点から連綿と続く小規模古墳群の可能性もある。また、市C地点では古墳時代中期以前の遺物が確認されていない。愛A地点と97Eからは出土しているが、この間の地点が空白となる。市C地点の所見から推察するとこの地点の下面には北西から南西にかけての自然流路が縦断していることになる。

（3）中世から戦国の遺物は比較的新しい時期のものが目立つ。年代では15世紀を中心としたその前後となる。志賀城に関連する遺物群か。

次に西志賀遺跡の調査は1995年に市営貝田荘の南東隅地点（仮称市D地点）、市B地点に南接する道路を西へ約400mにあたる。調査面積は約120m²。遺構は弥生時代Ⅲ～Ⅳ期の環濠があげられる。報告者の服部哲也はこの環濠を居住域の北限として捉えている。遺物は環濠に伴うⅢ～Ⅳ期を中心に、環濠に切られた包含層から弥生時代Ⅰ期とⅤ期の遺物も出土している。環濠の検出面は標高2.5m前後、Ⅰ期の包含層が2m前後。志賀公園遺跡の下面の検出より若干低い、ほぼ同一レベル。志賀公園遺跡97Eの居住域の時期と比較してみると弥生時代Ⅱ期の資料が市D地点にはない。ただ、南方の貝塚地点では層位的（西志賀Ⅱ層・朝日層）に確認されている。97EではⅠ期とⅢ期の資料がない。

以上の調査事例を踏まえて貝塚地区を併せ、志賀公園遺跡と西志賀遺跡の接点を考えてみたい。

（永井）

4.2. 志賀公園遺跡と西志賀遺跡の接点

まず、周辺の遺跡分布から見てみよう。志賀公園遺跡の南東約400mに綿神社遺跡がある。昭和7(1932)年、神社改修工事にて須恵器の円窓付壺が出土している。古墳時代後期。さらに公園から東へ約500m、ちょうど国道41号周辺に黒川遺跡がある。弥生土器が確認されている。そのほか、公園の南方約600mには田端城跡、北西約800mには古墳～室町時代の稲生遺跡、北東約1kmには安井城跡と鳩岡遺跡(鎌倉時代)がある。

さて、今回は弥生時代に焦点を当て遺跡の拡がりを考えてみる。そこで、西志賀遺跡の中心地点とされている貝塚地区(西区貝田町1丁目58番地周辺)を中心に捉えてみる。貝塚地区はⅠ～Ⅵ期までの資料がほぼ連綿と確認できる。この地区から北へ約100mの位置に市D地点が位置する。Ⅲ～Ⅳ期の遺物が堆積する環濠が北東から南西に向けて延びている。これを弥生時代Ⅲ期前後における居住域の北限として捉えると、志賀公園遺跡97Eで確認したⅡ期末の居住域は別の集落と考えなければならない。また、居住域の西側、つまり市D地点寄りには墓域が展開することからも追認できよう。因みに97Eと市D地点の直線距離は約600mある。貝塚地区の東約50mの南北に走る道路は昭和6年の三郷悪水路暗渠化工事の際、多数の弥生土器が出土したとの記録がある(樋A地点)。市D地点の西約70mでは昭和8年に人骨と銅鏃が見つかった(樋B地点)。市D地点環濠の西側が墓域として推定できる。さらに貝塚地区から南方約100m、樋A地点のある道路を挟んで東側の下水道工事の立会調査で弥生土器が確認されている(昭和61年)。これら貝塚地区を中心に西への拡がりはつかめないが東、北、南への拡がりは確認できる。すなわち、南北約200m、東西約200mが西志賀遺跡の最低範囲と思われる。ただし、西への拡がりは確認できないし、市D地

点の環濠は北東に向かって延びているので、北東方面と西側方面へのさらなる遺跡の拡がりは推定できる。

発想を転換してみよう。庄内川を挟んで西側には朝日遺跡がある。朝日遺跡の場合、居住域が北と南にある。北と南各々が囲郭され、さらにこれらを大きく囲郭する大集落で、推定範囲は東西1km、南北800m、面積は80万㎡におよぶ東海地方最大級の遺跡である。西志賀遺跡がこれほどの規模の遺跡であるとは思われないが、居住域が大きく2つ存在する可能性もある。すなわち、貝塚地点周辺の西居住域、志賀公園周辺の東居住域と捉え、大きく1つの遺跡として考える。そうすると、東西約800m、南北約600mの拡がりが想定できる。

以上を要約すると2つの仮説になろう。

(1) 貝塚地区を中心とする遺跡と志賀公園周辺を中心とする遺跡、2つの集落遺跡とする捉え方。

(2) 朝日遺跡のように2つの居住域によって構成される大規模集落。(永井)

5. おわりに

本稿では金城文化財保護委員会所蔵資料の紹介を基軸に、志賀公園内の池(愛A)地点の再評価を目指した。また、近年の調査成果を盛り込んで志賀公園と西志賀の接点を提示した。今回、資料の実測調査を進めるにあたり、小栗鐵次郎の業績と金城文化財保護委員会および金城小学校の長年にわたる資料の管理には非常に感銘を受けた。志賀公園と西志賀に調査のメスが入って70年になろうとしている。現在調査中の地区で新たに判明する事実もあろう。昭和5年の調査記録は古典的なものではなく、現在でも非常に有効な資料として再評価されるべきである。(永井)



謝辞

最後になりましたが、今回の資料調査では多数の方々にご協力とご指導をいただきました。記して感謝いたします。金城文化財保護委員会所蔵資料調査では清水芳雄氏（金城文化財保護委員会々長・金城学区協議会々長）に快くご承諾いただきました。資料の保管先である名古屋市立金城小学校では石黒勝校長、庇良秋教頭はじめ諸先生方には資料を借用する際ご迷惑をお掛けいたしました。名古屋市博物館では金城文化財保護委員会からの受託資料の実測調査と小栗鐵次郎関連資料の調査を梶山勝氏にご協力いただきました。『小栗鐵次郎の日記抄』や『小栗鐵次郎の写真帖』の引用掲載については梶山氏にご尽力いただき、小栗けい氏に快諾を得ました。西志賀遺跡の過去の調査記録に関しては、明治大学石川日出志教授をはじめ考古学博物館の方々に、現在再整理中にもかかわらず未公表資料を閲覧させていただきました。三谷知佳子氏には西志賀遺跡の調査風景写真と『金城の遺跡史話』（三谷石水著）をご提供いただきました。名古屋市教育委員会竹内宇哲氏、見晴台考古資料館木村有作氏、村木誠氏、田原和美氏には名古屋市教育委員会関連調査の記録と出土資料についてご教示いただきました。資料の時期同定については、愛知県史編さん室城ヶ谷和広氏、（財）瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏、岡本直久氏、青木修氏にご教示いただきました。資料の実測については、宮腰健司氏、原田幹氏、早野浩二氏、関美由樹氏にご協力いただきました。

出典一覧

- | | |
|--------|-----------------------------------|
| 第1表 | 文献を参考に西原が作成。 |
| 第2表 | 第2表下の文献を参考に北村が作成。 |
| 第3表 | 資料貼付「掘出票」をもとに永井が作成。 |
| 第1図 | 名古屋市都市計画図（1/2,500）を一部改変。 |
| 第2図 | 明治大学資料・文献3・5・6・24・31・32などをもとに作成。 |
| 第3図 | 明治17年地籍図を一部改変。 |
| 第4～8図 | 永井作成。（一部に宮腰健司・早野浩二・原田幹の原図含む。） |
| 第9～10図 | 北村作成。 |
| 第11図 | 昭和12年大日本帝国陸地測量部作成（1/10,000）を一部改変。 |

写真1・30・31・33～35 名古屋市博物館提供

写真32 三谷知佳子氏提供

その他の写真は永井が撮影。

文献一覧

※文献は、発行年順に示した。

西志賀・志賀公園・志賀城・全般の項目に分けた。

西志賀遺跡に関わるもの

- 文献1 1931 小栗鐵次郎「銅鏃を出した西志賀貝塚」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』9愛知県
- 文献2 1932 林魁一「名古屋市西志賀貝塚」『考古学』第3巻第3号東京考古学会
- 文献3 1933 吉田富夫「尾張西志賀貝塚に就いて」『考古学雑誌』第23巻第6号考古学会
- 文献4 1933 森本六爾「弥生式土器葉状文の一新例—名古屋市西志賀貝塚発見品—」『考古学』第4巻第2号東京考古学会
- 文献5 1934 吉田富夫「尾張西志賀貝塚発見の土器に就いて」『考古学』第5巻第1号東京考古学会
- 文献6 1934 小栗鐵次郎「尾張西志賀貝塚発見の人骨と銅鏃」『考古学』第5巻第5号東京考古学会
- 文献7 1934 樋口敬治「尾張西志賀遺物図譜」『考古学』第5巻第10号東京考古学会
- 文献8 1934 吉田富夫「尾張西志賀貝塚発見の土器に就いてⅡ」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
- 文献9 1934 藤沢一夫・小林行雄「尾張国西志賀の遠賀川系土器」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
- 文献10 1934 藤沢一夫・小林行雄「尾張国西志賀の櫛目式土器」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
- 文献11 1934 小林行雄「西志賀人生業問題資料」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
- 文献12 1934 森本六爾「西志賀弥生式土器号の後に」『考古学』第5巻第2号東京考古学会
- 文献13 1934 小栗鐵次郎「名古屋市西志賀貝塚(其二)」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第12愛知県
- 文献14 1934 小林行雄「弥生式彩色文土器一例」『考古学』第5巻第4号東京考古学会
- 文献15 1934 森本六爾「底部に布痕を有する土器の一形式」『考古学評論』第1巻第1号東京考古学会
- 文献16 1934 藤沢一夫「尾張西志賀発見の石鏃」『考古学』第5巻第4号東京考古学会
- 文献17 1935 吉田富夫「尾張に於ける弥生式文化の型と時期」『考古学評論』第1巻第2号東京考古学会
- 文献18 1935 吉田富夫「尾三地方史前土器の一二の種数」『考古学』第6巻第1号東京考古学会
- 文献19 1935 吉田富夫「尾張国西志賀貝塚発見の土器に就いて」『考古学年報』第4冊日本考古学協会
- 文献20 1937 吉田富夫「尾張国西志賀発見の銅鐸形土製品」『考古学』第8巻第11号東京考古学会
- 文献21 1938 森本六爾・小林行雄「弥生式土器聚成図録」『東京考古学会学報』第1冊東京考古学会
- 文献22 1939 吉田富夫・杉原莊介「東海地方先史時代土器の研究」『人類学先史学講座』第13巻
- 文献23 1941 吉田富夫「尾張国西志賀に於ける初期弥生式文化の複合」『古代文化』第12巻第9号日本古代文化学会
- 文献24 1949 杉原莊介「尾張西志賀遺跡調査概報」『考古学集刊』第3冊東京考古学会
- 文献25 1949 紅村弘「西志賀貝塚出土の一土器について」『考古学集刊』第3冊東京考古学会
- 文献26 1949 杉原莊介「尾張西志賀貝塚の層位」東京考古学会研究発表
- 文献27 1953 吉田富夫「西志賀貝塚回顧談」『人類学研究』1ノ3南山大学人類学研究会
- 文献28 1955 杉原莊介・岡本勇「愛知県西志賀貝塚の遠賀川式土器」考古学協会第16回総会研究発表要旨
- 文献29 1955 澄田正一「日本原始農業発生の問題」『名古屋大学文学部研究論集』XI名古屋大学文学部
- 文献30 1958 紅村弘「名古屋市西志賀貝塚」『文化財叢書』第19号名古屋市文化財保存委員会
- 文献31 1960 杉原莊介編『日本農耕文化の生成』図録編・本文編東京堂
- 文献32 1961 杉原莊介・岡本勇「愛知県西志賀遺跡」『日本農耕文化の生成』本文編東京堂
- 文献33 1969 深田正韶編『尾張志』(下)歴史図書社
- 文献34 1970 原田幹『尾張名所図会』下巻愛知県郷土資料刊行会
- 文献35 1994 名古屋市博物館『あゆみと考古学』名古屋市博物館
- 文献36 1996 服部哲也編『西志賀遺跡 —発掘調査の概要—』名古屋市教育委員会

志賀公園遺跡に関わるもの

- 文献37 1931 小栗鐵次郎「名古屋市北部沖積層に於ける遺物包含地」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』9愛知県
- 文献38 1967 安達厚三「尾張地方の初期須恵器について」『名古屋市博物館(仮称)建設準備ニュース』6号名古屋市教育委員会
- 文献39 1994 木村光一編『志賀公園遺跡発掘調査の概要』名古屋市教育委員会
- 文献40 1995 山田鉦一編『志賀公園遺跡 第2次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
- 文献41 1996 木村光一編『伊勢山中学校遺跡(第5次)』埋蔵文化財発掘調査報告書24名古屋市教育委員会

志賀城に関わるもの

- 文献42 1969 奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』角川書店
 文献43 1974 名古屋史談会編『張州府志』(全)愛知県郷土資料刊行会
 文献44 1976 生田良雄編『張州雑誌』第12巻愛知県郷土資料刊行会
 文献45 1983 名古屋市教育委員会編「寛文村々覚書(上)」『名古屋叢書続編』1名古屋市教育委員会
 文献46 1984 名古屋市教育委員会編「尾張徇行記(2)」『名古屋叢書続編』5名古屋市教育委員会
 文献47 1991 遠藤才文・梅本博志編『愛知県中世城館調査報告I(尾張地区)』文化財図書刊行会

全般に関わるもの

- 文献48 1934 北区役所教育課『北区誌』北区役所総務課
 文献49 1955 本庄栄治郎監修『大正昭和名古屋市史』第9巻名古屋市
 文献50 1962 愛知県文化財保存振興会編『愛知の史跡と文化財』泰文堂
 文献51 1967 吉田富夫「古代の北区」『むかしの北区』名古屋市北区役所
 文献52 1972 三谷石水『金城の遺跡史話』金城小学校PTA・金城学区協議会
 文献53 1978 豊田市郷土資料館『小栗鉄次郎コレクション展』豊田市教育委員会
 文献54 1978 小栗武夫編『小栗鉄次郎の日記抄』
 文献55 1982 名古屋市立博物館『吉田富夫コレクション』名古屋市立博物館
 文献56 1984 澄田正一・伊藤安男『東海の先史遺跡 綜括編』紅村弘
 文献57 1985 長谷川國一『北区の歴史』愛知県郷土資料刊行会
 文献58 1988 名古屋市博物館『考古学の風景』名古屋市博物館
 文献59 1990 名古屋市教育委員会編『名古屋の史跡と文化財(改訂版)』名古屋市教育委員会
 文献60 1994 北区制50周年記念事業実行委員会編『北区誌』名古屋市北区役所
 文献61 1994 岩野見司・赤塚次郎『日本の古代遺跡 48 愛知』保育社
 文献62 1997 新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』第1巻名古屋市

補足

- 文献63 「清須合戦記」『続群書類従』第二十一輯上
 文献64 1988 加藤安信編「Ⅱ. 調査概要 1. 立会調査名古屋市西区」
 『愛知県埋蔵文化財情報3 昭和61年度』愛知県教育委員会



写真30



写真31

写真30 西志賀人骨出土地点
(樋B地点)

写真31 西志賀人骨出土状態
(樋B地点)

以上2点は文献6に掲載されている
S.8.12.8撮影か。

写真32 西志賀調査風景
(三谷知佳子氏提供)

写真33～35 志賀公園出土遺物
(愛A地点)

文献37に掲載されている。

※写真32以外は名古屋市博提供。



写真32



写真33



写真34

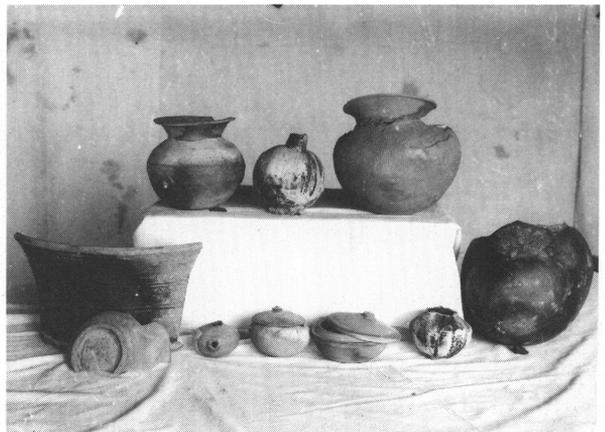


写真35



写真36



写真37